

中日両言語の語順について
Concerning the Word Order of the Chinese and Japanese Languages

高橋弥守彦
TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要

假如汉日两种语言的结构仅仅是「SPO」和「SOP」的话,那么只要明白单词或短语的意思,汉日互译起来就不至于很难。但是,从连谓句、兼语句这些深受中国文化影响的句式来看,汉日两种语言的特色则非常显著,其翻译难度也较大。例如。“我每天早上八点骑车去学校。”[毎朝8時に自転車で学校へ行く。]中的下划线部分,很多学生常常译为[自転車に乗って学校へ行く]。这样的译文虽然不能算错,但是从中日两国的“对称文化”和“非对称文化”这种文化层面来审视的话,其差异还是显而易见的。

本文主要着重于汉日两种语言的语序问题。如上例所示,要想从文化层面解释清楚这一现象并非易事。如何将具有中国特色的汉语翻译为具有日本特色的日语,则是本文的宗旨所在。

キーワード: 意味 リズム 構造 語順 減訳

目次

- 1 はじめに
- 2 主語の位置移動で訳す中国語表現
 - 2.1 1文や1分文中における主語の位置移動
 - 2.2 2分文中における主語の位置移動
 - 2.3 3分文以上における主語の位置移動
- 3 連体修飾語を伴う主語で訳す中国語表現
 - 3.1 文頭に用いる連体修飾語
 - 3.2 文中に用いる連体修飾語
 - 3.3 文末に用いる連体修飾語(原文文末を連体修飾語で訳す訳文)
 - 3.4 体言止めの連体修飾語

4 文構造を変える中国語表現

5 おわりに

1 はじめに

どの言語も、文は単語の意味と文の構造、それに各言語独特のリズムから成り立っている。リズムは各言語の流暢さを表す。文のリズムが悪いと、どんなに素晴らしい内容であっても、文としてぎこちなく、読みづらい。

周知のように、中国語の基本構造は「SPO」文型であり、日本語は「SOP」文型¹⁾である。これらを基本とする語順だけであれば、文がどんなに分かり難い単語の用法であろうとも、どんなに複雑な語順であろうとも、語順に対応関係が認められ、推敲を重ねれば、どんなに難しい文であっても何とか訳せる。以下の中文日訳は、両言語の語順に対応関係が認められるので、翻訳はさほど難しくない。

- (1) 如今儿子五岁了。 (『人民』88-7-101)

いまでは息子は五歳になっている。(同上)

- (2) 推开门, 不幸的女人疑惑地望着她。 (『人民』96-11-85)

ドアが開いて、不幸な女が訝しげに彼女を眺めた。(同上)

- (3) 那年七月, 我以五分之差, 从通往大学的独木桥上栽落下来。 (『人民』97-5-87)

その年の七月、僕は五点たりなくて、大学に通ずる丸木橋を滑り落ちてしまった。 (同上、97-5-86)

上掲の3例は、中日両言語の基本構造によって作られているので、基本的には語順が対応している。そのため、例(3)の“从”を[から](起点)または[を](通過点)に訳す“从通往大学的独木桥上栽落下来”[大学に通ずる丸木橋から／を滑り落ちてしまった]を除けば、さほど翻訳が難しいわけではない。“从”はどちらにも訳せ、どちらに訳しても間違いはないが、言語環境を考慮すると、受験生にとって、丸木橋は通過点の一つなので、この文では通過点を表す[を]格が良い。しかし、以下の文のように、中日両国の文化「対の文化」と「非対の文化」²⁾に影響された特色ある構造の文となると、両言語の特徴を出すためには、翻訳の難度が増し、かなり訳しにくくなる。

- (4) 安安像做梦一样, 也到村里开了介绍信, 和那女人到乡里很快领回了结婚证。 (『人民』89-7-99)

1) 一般に中日両言語の基本構造は、「SVO」文型と「SOV」文型といわれている。しかし、中国語の「V」の箇所に形容詞「她一个晚上全白了头发。」[彼女は一晚で髪が真っ白になった。]を用いる文もある。これによって、筆者は「V」(動詞)ではなく「P」(述語: Predicate)を用いている。

2) 中日両国には文化の違いがある。中国は古来偶数を重んじ、日本は奇数を重んじている。これを筆者は「対の文化」と「非対の文化」と呼んでいる。

夢心地の安んは(※も)、村で自分の紹介状を作ってもらうと、その女といっしょに郷役場に(※へ)行って早速結婚証をもらって帰ってきた。(同上)

- (5) 呂月毎星期回来一次，一到家就帮助哥哥忙饭馆里的事。呂星不让她干。(『人民』94-10-97)

呂月は週1回家に帰ってきて、そのたびに兄の食堂を手伝おうとしたが、呂星は許さなかった。(同上、94-10-96)

- (6) 挑了个没有课的下午，大家一起骑车去市里的体育用品商店，这里的球衫式样可真不少，花色也多，可麻烦也跟着来了。(『人民』89-8-101)

午後に授業のない日を選んで、みなは自転車でいっしょに市内のスポーツ用品店へ行った。この店の品数の多いこと、色もとどろり、却ってめんどろりになった。(同上)

例(4)の連用連語³⁾“到村里开了介绍信”は、[村へ行って自分の紹介状を作ってもらうと]ではなく、[村で自分の紹介状を作ってもらうと]と訳され、“到乡里很快领回了结婚证”は[郷役場に行って早速結婚証をもらって帰ってきた]と訳されている。対の文化の影響を受ける前者の連用連語“到村里+开了介绍信”は、日本語は非対の文化の影響により、[村で+自分の紹介状を+作ってもらうと]と訳されている。これは中日両言語のそれぞれの特色を出した見事なまでの翻訳だが、後者の連用連語“到乡里很快领回了结婚证”は、[郷役場へ行って]より[郷役場へ行って]と訳す方がいいだろう。その前の訳に[その女といっしょに]の[に]があるので、重複を嫌う日本語⁴⁾では「へ」格の[郷役場へ行って]と訳すと、リズムがいっそう良くなる。例(5)の“一到家就帮助哥哥忙饭馆里的事”の訳[そのたびに兄の食堂を手伝おうとしたが]も、“一到家”をその前の連語“回来一次”の訳[家に帰ってきて]と重複させず、[そのたびに]と訳したのも重複表現を避けた優れた訳である。また、例(6)の対の文化の影響を受けた拡大連用連語“一起骑车+去市里的体育用品商店”を[に]が重複する[いっしょに自転車に乗って+市内のスポーツ用品店へ行った]と訳さず、非対の文化の影響に基づき[自転車でいっしょに市内のスポーツ用品店へ+行った]と訳したのも見事なまでの訳文である。

上掲の原文と訳文は、それぞれ中日両国の文化的影響「対の文化」と「非対の文化」を受けた原文と訳文とである。原文も訳文もそれぞれの文化的影響を見事なまでに両言語に反映しているので、いずれも文化が言語に影響を与えた優れた原文と訳文といえる。以下

³⁾ 本連語は一般に連動連語と言われているが、連動連語の一方が形容詞の場合“我收到你的礼物高兴极了。”(『征服 HSK 汉语语法』p. 215)もあるので、筆者は連用連語と言っている。

⁴⁾ 中国語は四字一句、日本語は俳句の575が基本構造なので、中国語は分かり易くするため、重複を好む傾向「黙而不語」にある。しかし、日本語はそうすると、冗漫になる傾向があるので、それを嫌い、一般に重複義表現「黙して語らず」を避け、実詞単語義表現「黙ったまま」で訳す。

の文は、原文と訳文の語順が対応していない実例である。なぜ訳文は原文の語順通りに訳さなかったのだろうか。

- (7) 他又在空中抓了几粒，给沁沁。 (『人民』89-3-102)

空中でタネを数粒つかむと、彼はシンシンにあげた。(同上)

- (8) 安安在屋里看见了，出来锁门就走。 (『人民』89-7-98)

部屋の中でそれを見た安安は、出てくると戸口に錠を下ろして出かけた。(同上、89-7-99)

- (9) 妈再抱他，他再下来。搬个小凳坐在门口。 (『人民』89-7-98)

また寝かせると、また起きて、戸口に腰掛けを運んでそこにすわった。(同上、89-7-99)

- (10) 醒来，不见了妈，屋里空荡荡的，他把嘴唇咬出了血。 (『人民』89-7-98)

目をさますと、母がいなくなっていた。がらんとした部屋で、安安は唇をかんだ。血がにじんだ。(同上、89-7-99)

例(7)は、原文“他又在空中抓了几粒，给沁沁”と対応するように、訳文を「彼は空中でタネを数粒つかむと、シンシンにあげた」と表現せず、主語の位置を換え、なぜ「空中でタネを数粒つかむと、彼はシンシンにあげた」と訳したのだろうか。語順通りに訳すよりも、訳文のほうが日本語として分かり易くなっているようである。例(8)も原文“安安在屋里看见了”と対応するように、訳文を「安安は部屋の中でそれを見た」と表現せず、なぜ原文の構造を換え、主語の前に連体修飾語を伴う訳「部屋の中でそれを見た安安は」と訳したのであろうか。この訳文のほうが中国語の語順通りに訳すよりも、日本語としては分かり易い。例(9)の下線部は対の文化の影響を受けた連用連語“搬个小凳坐在门口”を用いているが、訳文「戸口に腰掛けを運んでそこにすわった」は、原文に対応した訳「腰掛けを運んで戸口にすわった」ではない。なぜ原文に対応させて訳さず、このように訳したのであろうか。この訳文も語順通りに訳すよりは日本語として分かり易い。例(10)の下線部は“把”字連語である。これは「安安が唇をかむと血がにじんだ」とも訳せるのに、なぜ文構造を換えて「安安は唇をかんだ。血がにじんだ」と訳したのであろうか。これらの訳文はなぜ原文に対応させなかったのだろうか。これらの原文と訳文には、中日両言語の文化的特徴が出ている。

原文に対応させて訳すよりも、原文に対応させないこれらの訳文のほうが、日本語としては分かり易く、臨場感がよく出ている。明らかに表現効果が異なっている。ここには中日両言語の相違が出ている。本稿では実例を分析検討することにより、中国語の語順通りに訳すよりも、語順をかえるなどをして訳した訳文のほうが、なぜ分かり易く臨場感が出るのかなどの理由を以下で明らかにする。

中日両言語の文構造関係は対応する関係も含めると、多種多様だが、本稿では原文の語

順をかえ、主語の位置移動による日本語訳（例 7）、連体修飾語を伴う主語による日本語訳（例 8）、および中国語の文構造を変える日本語訳（例 9、10）の 3 点に絞って、以下で両言語の関係について論を進める。

2 主語の位置移動で訳す中国語表現

中文日訳では、以下の文に見られるように、よく日本語の主語が減訳される。これは日本語が老若男女によって、表現が異なる役柄言葉⁵⁾や世代言葉なので、主語を減訳しても一般には誰が発している言葉なのかをとり違えることがないからである。

- (11) 夏初那个中午, 我从一场棋战中挣脱出来, 不免有些乏味。(『人民』88-8-96)

夏のはじめのある日のひるごろ、将棋をぬけ出したあと、なんとなく退屈していた。(同上、88-8-97)

- (12) 我们那些个弄文字的女友, 她们常常喝不加糖的咖啡, 然后写咖啡一样苦涩的情事。(『人民』16-11-70)

文字仕事をやっている私の女性の友人たちは、いつも砂糖を入れずにコーヒーを飲み、コーヒーのように苦々しい情事を書く。(同上)

- (13) “没有的事,” 老吴说, “我们家一直都在北京。”(『人民』21-2-82)

「そんなことはないよ」と呉さんは言った。「ずっと北京に住んでいた」。(同上、21-2-83)

例 (11) では中国語の二重下線部“我”、例 (12) では“她们”、例 (13) では“我们家”の各主語が、日本語では減訳されている。中国語には、役柄言葉や世代言葉がないので、動作や行為などの表現を見ただけでは、誰の発した言葉か分からない場合が多い。そのため、一般には主語を減訳しない。しかし、役柄言葉や世代言葉により表現する日本語は、老若男女によって表現が異なるので、主語を減訳しても、誰が発した言葉なのかが判断できる。そのため、ヒト主語はよく減訳される。また、現代中国語“我学习/学汉语呢。”[私は中国語を勉強しています。] は対の文化の影響を受けて、2 音節“学习”で 1 単語を作る場合が多いが、基本は 1 音節“学”で 1 単語である。日本語は多音節[勉強する]で 1 単語なので、中国語の原文をすべて訳すと、日本語の文が長くなる傾向にある。減訳しても日本

⁵⁾ 中国語は、以下の文のように、男性も女性も基本的に同じような表現をするが、日本語では表現が異なる。これを筆者は役柄言葉といっている。たとえば、以下のような中日両言語である。なお、金水敏などは、このような日本語を役割語と名付けている。

妈妈说：“苗苗，这钱给妈妈，帮你买件衣衫。”(『人民』88-2-96)

「苗苗、このお金、ママにちょうだい。お洋服買ってあげるから」とママ。(同上)

爸爸说：“苗苗，这钱给爸爸，帮你买最好看最好看的小人书。”(同上)

「苗苗、このお金でパパが、すごくすてきな絵本を買ってやろう」とパパ。(同上)

語の文意に影響がない場合は、なるべく減訳し、文が冗漫になることを避ける。これも主語減訳の一因となっている。しかし、以下の文のように、主語が減訳されない文も相当数ある。

- (14) 我的红包，母亲收到过，但未打开过。（『人民』21-1-82）

私のお年玉は母に届くが、開かれることはない。（同上、21-1-83）

- (15) 而立之年，我喜得千金。（『人民』16-1-72）

30歳になった年、私に子どもができた。（同上）

例(14)(15)の主語は、ヒト以外の名詞性の語句“我的红包、而立之年”である。一般にヒト以外の名詞性語句が主語になる場合は、述語が役柄言葉や世代言葉で表現できないので減訳できない。例(11)(12)(13)の主語は、ヒト名詞あるいはそれに関連している語句であったが、例(14)(15)は人に関連する語句以外である。人に関連する語句であれば、役柄言葉や世代言葉によって、誰の発している言葉かが分かるが、主語が役柄言葉や世代言葉のないヒト以外の語句であれば、述部を見ても主語の判断はできない。そのため日本語の訳文であっても、一般にヒト以外は主語の減訳ができない。

これらとは別に、以下の文に見られるように、日本語では主語の減訳ではなく、文や分文（文節）における主語の位置移動により訳す文もある。

2.1 1文や1分文中における主語の位置移動

一般に1文や1分文中であれば、訳文であっても、次の文に見られるように、主語の位置移動はおこらない。

- (16) 小李唯唯诺诺地答应着。（『人民』21-3-88）

おいは仕方なくうなずいた。（同上、21-3-89）

主語の位置移動は、以下の文のように、1文や1分文中でもおこる場合がある。日本語は主語の位置移動があっても、名詞の格が発達しているので、文中の位置にかかわらず、主語であることが分かる。

- (17) 我为我双亲有这样的爱情而骄傲。（『人民』88-11-90）

両親のこんな愛情を、私は誇らしいと思った。（同上）

- (18) 沁沁没记起和先前种下的有什么不同。（『人民』89-3-102）

前に植えたタネとどこが違うのか、シンシンは分からない。（同上）

- (19) 他却怔怔地，一直目送着她的身影消失。（『人民』96-11-85）

消えて行く彼女の後ろ姿を目で追いながら、彼は呆然とその場に立ちつくした。

（同上、96-11-84）

- (20) 安安正好从这里走，他本想把小毛抱回家，但一听，小毛在“妈呀——妈呀”的喊叫。他扭头就走。（『人民』89-7-99）

ちょうどそこへ（※を）安安が通りかかった。抱いて家へ連れて行ってやろう

と思っていたのだが、「お母さん、お母さん」とわめいているのを聞くと、顔をそむけて行ってしまった。(同上)

- (21) 他没想到会在无意之中做出件蠢事来，岂只是蠢呢？（『人民』89-3-100）

意識的ではないにしろ、こんなバカなことをするなんて、彼には意外だった。

けれど、バカなことといって、それですまされるのだろうか。(同上)

例(17)は原文も訳文も一つの文である。ただ、訳文「両親のこんな愛情を、私は誇らしいと思った」は、強調するところに読点(、)を用い翻訳に工夫が凝らしてある。これを原文に対応させて、「私は両親のこんな愛情を誇らしいと思った」と訳しても間違いではないが、強調するところを文頭に用い、また読点を用いて強調を明確にしてある訳文に比べると、やや単調である。例(18)の構造は“沁沁+没记起+和先前种下的有什么不同”であり、客語“和先前种下的+有+什么不同”がやや複雑になっている。主語“沁沁”が文頭に用いられているが、訳文は2分文「前に植えたタネとどこが違うのか、+シンシンは分からない」に分けられ、後の分文の頭に用いられている。例(19)の主語“他”は文頭に用いられているが、訳文は2分文に分けられ、後の分文の頭に用いられている。これは「彼は呆然とその場に立ちつくし、消えて行く彼女の後ろ姿を目で追っていた」と訳しても間違いではないが、主語「彼は」を結論の前に用いる訳文のほうが、主語と結論が近接しているので、文意が分かりやすい。日本語は理由「消えて行く彼女の後ろ姿を目で追いながら」・結論「呆然とその場に立ちつくした」の順序のほうが一般的であるとともに、リズムを作る長さのバランスもよくなっている。

例(20)では主語“安安”が文頭に用いられているが、訳文はそうではない。これは日本語の主語が「ガ格の名詞[安安が]」なので、どちらに用いても文意が変わらないからである。日本語の主語を文頭「安安がちょうどそこへ(※を)通りかかった」に用いると、自己主張が強く出るので、その必要性のない文は一般に文頭に用いない。例(20)も例(19)にほぼ同じである。例(21)では主語“他”が文頭に用いられているが、訳文はそうではない。これは日本語の主語が「ニハ格の名詞[彼には]」なので、どちらに用いても文意が変わらないからである。また、結論の前に主語を用いるほうが、文意が分かり易くなる、ということもある。

2.2 2分文中における主語の位置移動

中国語の2分文中における主語の位置は、以下の複文に見られるように、一般には文頭に用いられる。その訳文も原文に対応する場合が多く、やはり一般には文頭に用いる。

- (22) 儿子一瞅着五线谱上的“蝌蚪”，就挥起小拳头。（『人民』88-7-101）

息子は、五線譜のおたまじゃくしを見るたびに、小さなこぶしを振り上げる。

(同上)

例(22)の原文と訳文の主語は、どちらも文頭に用いられ、基本的に対応している。二

つの連語はどちらも行為であり、前者は理由“一瞅着五线谱上的‘蝌蚪’”であり、後者は結論“就挥起小拳头”である。しかし、以下の文に見られるように、主語の位置移動で訳す日本語の訳文も少なからずある。この場合の主語の位置移動でおこる言語現象は、3分文中にも相当数あるが、2分文中でおこる場合が一番多い。訳文ではなぜ主語がこのような位置移動をする場合が多いのであろうか。実例を見てみよう。

- (23) 他又在空中抓了几粒，给沁沁。（『人民』89-3-102）；前出例（7）

空中でタネを数粒つかむと、彼はシンシンにあげた。（同上）

- (24) 沁沁把它们夹进了小人书，说明年还要种。（『人民』89-3-102）

それを絵本の間にはさむと、シンシンはいった。「来年また、植えるの」（同上）

- (25) 他们要她坚强，要她作好最后的思想准备。（『人民』96-11-85）

心を強くして、最期を覚悟して下さいと医者が言った。（同上、96-11-84）

例（23）は主部が一語“他”で、述部が二つの連語“又在空中抓了几粒”“给沁沁”から作られている。二つの連語はどちらも主語の行為であり、連続している。原文に対応して訳すと、[彼は空中でタネを数粒つかむと、シンシンにあげた]となるだろう。例（24）も主部が一語“沁沁”で、述部が二つの連語“把它们夹进了小人书”“说明年还要种”から作られている。二つの連語は主語の行為と発話とである。原文に対応して訳すと、[シンシンは、それを絵本の間にはさむといった。「来年また、植えるの」]となるだろう。だが、主語の位置移動から見ると、[それを絵本の間にはさむと、シンシンは「来年また、植えるの」といった。]と訳すことになるだろう。

例（25）も主部が一語“他们”で、述部が二つの連語“要她坚强”“要她作好最后的思想准备”から作られている。二つの連語はどちらも主語の発話である。しかし、どちらの分文も客語に対する主語の発話なので、並列的に訳され、主語の位置が例（23）（24）の語順と異なっている。原文に対応して訳すと、[医者が心を強くして、最期を覚悟して下さいと言った]となるだろう。

上掲の3例は、いずれも主部（主語）がひとつで、述部が二つの連語で作られている。二つの連語はいずれも主語の行為や発話である。主語の行為や発話が例（22）のように、理由と結論とになっていれば、両者の関係性を明らかにするために、主語を文頭に訳す方が優れているだろう。しかし、両者が行為（例23）や行為と発話（例24）、および発話の順序（25）などであれば、上掲3例の訳文に見られるように、主語の位置移動により訳すと、リズムがもっとよくなる。以上の点から、例（23）（24）と例（25）のように、主語の位置をどこにするかは、リズムの問題であり、これはまともな性のある述部の意味による、と言えるだろう。

2.3 3分文以上における主語の位置移動

一般的に言えば、3分文以上で作る中国語の複文は、そう多くない。中国語の3分文以

上における主語の位置は、以下の複文に見られるように、一般には文頭に用いられる。その訳文も以下の訳文に見られるように、原文に対応する場合が多く、やはり一般には文頭に用いられている。

- (26) 他随手拣了颗酷似花种的小鹅卵石，在沁沁亲他脖子喊着“爸爸好”的喜悦中，极认真地放进盆中，让沁沁亲手培上土，浇了水。（『人民』89-3-100）

彼はその間、花のタネに似た丸く小さな石をひろって、真面目くさって鉢の中に入れた。首にキスをしては、「パパ、いい人」と叫ぶシンシンは、うれしくて仕方がない。そして、土をかけ、水をかけさせてあげた。（同上、89-3-101）

- (27) 儿子去了三天，没有电话，儿子去了七天，依然没有音信。（『人民』97-10-75）
息子が出発して三日たったが、電話はかかって来なかった。七日が過ぎても依然として何の音沙汰もない。（同上）

例（26）は意味的に見れば、3 分文（“他随手拣了颗酷似花种的小鹅卵石”“在沁沁亲他脖子喊着‘爸爸好’的喜悦中，极认真地放进盆中”“让沁沁亲手培上土，浇了水”）で作られている。原文も訳文も、主語は文頭に用いられている。例（27）は 4 つの分文から作られている複文であり、例（26）と同様である。しかし、訳文によっては、以下の実例に見られるように、主語の位置が変わる場合もある。

- (28) 他听到这些传闻，心里很难受，却不知该怎么办。（『人民』96-11-85）

こんな陰口を耳にして彼は苦しんだが、さりとてどうしたらいいか分からなかった。（同上、96-11-84）

例（28）の訳文の主語“他”は、文頭ではなく 2 番目の分文の前に用いられている場合である。訳文の主語の前後は、一般に外からの情報〔こんな陰口を耳にして〕と内からの自省〔苦しんだ〕とに分けられる。

以下の 2 例は、どちらも主語の位置が 2 番目の分文の前にあり、訳文はどちらも主語の位置が原文と異なる。

- (29) 买卖挺红火，吕星挣了不少钱，两年还上了贷款。（『人民』94-10-97）

商売繁盛でたっぷりもうけ、呂星は二年で借金を返した。（同上、94-10-96）

- (30) 不管什么时候，安安一听到谁家的孩子喊妈，他就咬牙。（『人民』89-7-99）

安安は、いつどんなときでも、よその子が母親を呼ぶ声を聞くと、歯をくいしばった。（同上）

例（29）の訳文は、主語の前後が商売と借金とに分けられる。例（30）の訳文は主語を文頭に用い、外からの情報と内からの自省とに分けられている。主語の前後の情報と自省とに分けられる例（28）に倣えば、例（30）の訳文は〔いつどんなときでも、よその子が母親の呼ぶ声を聞くと、安安は歯をくいしばった〕となるだろう。主語〔安安は〕は結論〔歯をくいしばった〕の前に用いるほうが、主語と結論との関係が明確になるので、文意

がはるかに分かり易い。この訳のほうが、ここに主語を用いる理由がいつそう明確となる。また[よその子が母親の呼ぶ声を聞くと]と訳す方が、[よその子が母親を呼ぶ声を聞くと]と表現する訳文のように、「を」が連用されていないので、重複を避けることができ、リズムも良くなる。

3 連体修飾語を伴う主語で訳す中国語表現

連体修飾語で訳す中国語は、訳された日本語の構造からみると、文頭・文中・文末・体言止めの4類に分けられる。このうち文頭に用いられる場合が一番多い。そのほかの3類はごくわずかである。それでは、実例を検討し、なぜ連体修飾語で訳すのかを分析してみよう。

3.1 文頭に用いる連体修飾語

訳文が以下のような文頭に用いられる連体修飾語の場合は、原文が二つの分文（文節）で作る複文の場合が多い。なお、主部と述部との意味関係で、以下の文に見られるように、本構造の主体は人間である場合が多い。

- (31) 他既孝顺又软弱，依了母亲。（『人民』96-11-85）

親孝行で芯の弱い彼は母親の意見に従った。（同上、96-11-84）

- (32) 村里人知道了她的事，全都肃然起敬。（『人民』91-2-97）

このことを知った村の人たちは、みんな尊敬の念に打たれた。（同上）

- (33) 安安在屋里看见了，出来锁门就走。（『人民』89-7-98）

部屋の中でそれを見た安安は、出てくると戸口に錠を下ろして出かけた。（同上、89-7-99）

- (34) 一个女人夹着一件上衣，寻寻觅觅走来。对一个观棋的中年男子说：“走吧！元元的作业写完了。”说着把上衣给他披在身上。（『人民』97-2-87）

男物の上着を小脇にかかえた婦人が、左右を覗きながらやって来ると、将棋を見ていた一人の中年男性の肩にそっと掛けながら言った。「あなた、もういいわよ、元元の宿題終わったわ」（同上、97-2-86）

- (35) 安安见了，心疼地说：“这是咋了？”（『人民』89-7-100）

それを見た安安が心配して「どうしたんだ？」と聞くと、……（同上）

例(31)は原文と対応して訳すと、一般的には[彼は親孝行で芯が弱かったので、母親の意見に従った]、例(32)は[村の人たちはこのことを知ると、みんな尊敬の念に打たれた]、例(33)は[安安は部屋の中でそれを見て、出てくると戸口に錠を下ろして出かけた]、例(34)は[婦人が男物の上着を小脇にかかえ、左右を覗きながらやって来ると]、例(35)は[安安がそれを見ると心配して「どうしたんだ？」と聞くと、……]となるだろう。

例(31)(34)の前後の分文は、ともに理由と結果に分かれる。たとえば、例(31)は理由[彼は親孝行で芯が弱かったので]と結果[母親の意見に従った]である。例(34)は

前後の分文がともに「状態」を表している。しかし、前の分文は結果を含む状態「婦人が男物の上着を小脇にかかえ」であり、後ろの分文は進行中の状態「左右を覗きながらやって来ると」である。前後の分文は同じ状態を表しても、結果状態と進行状態とに分かれている、と言えるだろう。

例(35)も例(31)などと基本的には同様の構造だが、文末に会話文が入るので、構造からみると、やや複雑である。これも前例に倣い、中日両言語の語順に対応して訳すと、
「安安がそれを見て心配し「どうしたんだ？」と聞くと、……」と訳せるだろう。この訳文も、原因「安安がそれを見て」と結果「心配し「どうしたんだ？」と聞くと、……」とに分けられる。

それでは、実例中の訳文と原文に対応する訳文とでは、どのような違いがあるのだろうか。どちらも原文の基本的な意味を表現している点では問題ないが、表現効果とリズムが異なる。たとえば、例(31)で見ると、実例中の訳文は主部「親孝行で芯の弱い彼は」と述部「母親の意見に従った」との関係が明確であり、連体修飾語により主語を規定しているので、主語の性格が一層はっきりし、文構造が単純「親孝行で芯の弱い彼は+母親の意見に+従った」なのでリズムもよい。しかも、この訳は非対の文化を反映している。原文に対応する訳文は、二つの分文「彼は親孝行で芯が弱かったので」「母親の意見に従った」に分かれているので、表現効果がやや曖昧になる。この訳文は主語「彼は」の移動により、「親孝行で芯が弱かったので、彼は母親の意見に従った」とも表現できるが、これでは一般的な描写になる。次節で述べるように、実際、実例の中にはこういう訳文もある。3通りの訳文はどれも間違いではないが、訳文が用いられる文章の中で、言語環境を考慮しながら、それぞれの表現効果を検討し、ある言語環境の中で、どの訳文が一番ふさわしいのかを選択する必要がある。

次に訳文が文頭に用いられる連体修飾語で、原文が三つの分文（文節）で作られている複文を見てみよう。この場合も主体は人である。

- (36) 安安像做梦一样，也到村里开了介绍信，和那女人到乡里很快领回了结婚证。（『人民』89-7-99）

夢心地の安安は（※も）、村で自分の紹介状を作ってもらうと、その女といっしょに郷役場に行って早速結婚証をもらって帰ってきた。（同上）

- (37) 从此，安安吃百家饭，穿百家衣，渐渐长大了。（『人民』89-7-98）

それからの安安は、村人の情けにすがって、「百家の飯を食べ、百家の衣を着て（※「百家の飯を食べ、百家の服を着て」）だんだん大きくなった。（同上、89-7-99）

- (38) 我心灰意疏，收拾了笔墨纸砚，打算与十年寒窗告别。（『人民』97-5-87）

すっかり落ち込んだ僕は、勉強道具を片づけて、十年以上にわたった学校生活

におさらばしようと思った。(同上、97-5-86)

例(36)は原文と対応して訳すと、一般的には「安安も夢を見ているようであったが、……」、例(37)は「それから、安安は……」、例(38)は「僕はすっかり落ち込み、……」、と訳せるだろう。

例(36)(37)(38)の複文は、複文を作る3つの分文が、いずれも状態・理由・結果(結論)に分かれている。たとえば、例(36)は状態「夢心地の安安は(※も)」理由「村で自分の紹介状を作ってもらった」、結果「その女といっしょに郷役場に行って早速結婚証をもらって帰ってきた」である。例(37)も状態「それからの安安は」、理由「村人の情けにすがって、「百家の飯を食べ、百家の服を着て」、結果「だんだん大きくなった」である。例(38)は状態「すっかり落ち込んだ僕は」、理由「勉強道具を片づけて」、結論「十年以上にわたった学校生活におさらばしようと思った」である。

平叙文では主体がヒト以外は場所だけであった。また、平叙文以外は“有”字句が3例あっただけである。実例を見てみよう。

(39) 这个城市不再有他的身影、她的寄托了。(『人民』96-11-85)

彼がいなくなったこの町に、もはや自分の寄る辺はない。(同上)

(40) 二十五岁上, 终于有个媒人上了她家的门, 接着一个男人闯进了她的生活。(『人民』91-2-96)

二十五になってようやく、彼女の家結婚話を持ってくる人がいた。そして、一人の男性が彼女の生活に闖入してきた。(同上)

(41) 有人祝贺吕星发了财。(『人民』94-10-97)

財を成した呂星を、ある人が祝ってくれた。(同上)

連体修飾語を文頭に用いる主語は、例(31)から(38)までいずれも「は(※も)」格か「が」格の主語として訳され、非対の文化の影響を受け、原文より構造「連体修飾語+主語+目的語+述語」が単純化している。たとえば、例(31)は「親孝行で芯の弱い彼は+母親の意見に+従った」と分析できる。

例(39)は連体修飾語の主語に場所「この町に」が用いられている例である。例(39)(40)(41)は“有”字句であるが、訳文は多くの平叙文と同じように、主語はヒト「人」である。

3.2 文中に用いる連体修飾語

訳文が文中に用いられる連体修飾語の場合は、収集した例文の中にあつては、わずか1例しかなかった。実例を見てみよう。

(42) 醒来, 不见了妈, 屋里空荡荡的, 他把嘴唇咬出了血。(『人民』89-7-98)

目をさますと、母がいなくなっていた。がらんとした部屋で、安安は唇をかんだ。血がにじんだ。(同上、89-7-99)

例(42)の訳文は、連体修飾語を用いる状況語「[がらんとした部屋で]」が文頭に来て、状況語を強調している。原文は1つの複文だが、訳文は2つの文に訳されているので、下線部全体の構造が原文とは異なっている。しかし、訳文として、特に「[安安は唇をかんだ。血がにじんだ]」は、臨場感が出ている名訳である。

3.3 文末に用いる連体修飾語（原文文末を連体修飾語で訳す訳文）

訳文が文末の分文に用いられる連体修飾語の場合も、実例は少なく、今回の調査では、わずか2例だけであった。しかも以下の2例に見られるように、連体修飾語の作り方が両者では異なる。実例を見てみよう。

(43) 她自己呢？依然是单身一人。28岁了，车间里的姑娘都说她有点儿怪，有点儿冷。

（『人民』96-11-85）

だが彼女自身はというと、依然として独身で、もう二十八歳だった。職場の小娘たちは、陰で彼女のことをどこか変わった、冷たい女だと噂した。（同上、96-11-84）

(44) 她不顾一切地赶往出事地点。在县医院里，她见到了不省人事的他。（『人民』96-11-85）

彼女は人目も恐れず事故が起こった町にかけつけたが、県病院で彼女を待っていた彼はすでに意識不明だった。（同上、96-11-84）

原文文末の語句を連体修飾語として訳す場合もさほど多くなく、今回収集した例文の中では、わずか2例だけであった。しかし、その表現効果は高い。例(43)では“有点儿怪，有点儿冷”であり、例(44)では“他”である。これらはいずれも日本語の構造を単純化し、分かり易くなっているのが、表現効果が高い。原文に対応して訳せば、下線部の例(43)は、「職場の小娘たちは、陰で彼女がちょっとどこか変わった、冷たいところがあると噂した」、例(44)は「彼女は人事不省の彼を見た」となるだろうが、原文の訳文を連体修飾語で訳すことにより、誰が「どこか変わった、冷たい女だ」と「彼女を待っていた彼はすでに意識不明だった」と訳すと、話題の対象となっているヒトが、どういう状態になっているのかを分かり易くしている。

3.4 体言止めの連体修飾語

訳文が体言止めの連体修飾語の場合も、実例は少なく、わずか3例だけであった。実例を見てみよう。

(45) 奶奶把苗苗搂得紧紧的，泪水沿着她满脸的皱纹滴在苗苗黑油油的头发上，颤巍巍地说：“好乖乖，听爸爸妈妈的话。有你这一颗心，奶奶浑身都热了。”（『人民』88-2-97）

苗苗ちゃんをギュッと抱きしめるおばあちゃん。しわくちやの顔をつたって、涙が苗苗ちゃんの真っ黒な髪の上に落ちた。「お利口さんは、パパやママの話を

聞かなきゃね。その気持ちだけで、おばあちゃん、体じゅう熱くなってきちゃったよ」声は震えていた。(同上)

- (46) 沁沁的眼睛闪过希望又闪过失望。(『人民』89-3-101)

期待に輝く眼、失望にくれる眼。(同上)

- (47) 沁沁有了一盆属于自己的花，亲手种的花！ (『人民』89-3-100)

自分の花を手にしたシンシン。それも、自分の手で植えた花なのだ。(同上、89-3-101)

体言止めの文はそれぞれ特徴がある。例(45)は強調したい語句のある[苗苗ちゃんをギュッと抱きしめるおばあちゃん]、例(46)はリズム感を出す文[期待に輝く眼、失望にくれる眼]、例(47)は読みやすい文[自分の花を手にしたシンシン]が体言止めである。これら体言止めの訳文は、強調したい語句のある文・リズム感を出す文・読みやすい文に大別でき、体言止めにすると、対象となる体言の状態が分かり、一般の文に比べ文意がはるかに明確になる。

これらを一般的な訳文で表現すると、[おばあちゃんは苗苗ちゃんをギュッと抱きしめる][シンシンの眼は期待に輝き、失望にくれる][シンシンは自分の花を手にした(シンシンには自分に属する花、自分の手で植えた花があった)]などと訳されるだろうが、やや単調になってしまう。

4 文構造を変える日本語訳

中国語の文は一般にSPO文型で作る「一般文型」と対の文化の影響を受ける連述文や兼語文などの「特殊文型」とに大別できる。一般文型は中国語の基本構造「SPO」文型で作る各種の文であり、特殊文型は中国語の特徴が明確に出る「対の文化」の影響を受ける文である。

下記に見られる一般文型の中国語は、日本語の文の語順と基本的に対応するので、翻訳はさほど難しくないが、特殊文型の大多数の種類は、中国の「対の文化」の影響を受けているので、「非対の文化」の影響を受けている日本語には訳しにくい。まず、一般文型の文から見て行こう。

- (48) 如今儿子五岁了。(『人民』88-7-101)

いまでは息子は五歳になっている。(同上)

- (49) 骤雨倾过来，雷电抽过来，船帆折了，桅杆也断了，一排浪奸笑着撞进了船舱，船体也被撞开了道道裂口，正往下沉。(『人民』93-4-111)

豪雨が来て、稲妻が走り、帆は裂け、帆柱も折れた。大波が白い牙をむいて船室を襲い、船体にいくつもひびが入り、いまにも沈みそうだ。(同上、93-4-110)

(50) 推开门, 不幸的女人疑惑地望着她。(『人民』96-11-85)

ドアが開いて、不幸な女が訝しげに彼女を眺めた。(同上)

(51) 其实, 丑姐儿并不是很丑。(『人民』91-2-96)

事実、みにくい姉さんは決して容貌が悪いわけではない。(同上)

例(48)の下線部は主述述語文“如今+儿子五岁了”[今では+息子は五歳になっている]、例(49)の各分文“骤雨倾过来, 雷电抽过来, 船帆折了, 桅杆也断了”[豪雨が+来て、稲妻が+走り、帆は+裂け、帆柱も+折れた]は、いずれも動詞述語文、例(50)はやや複雑な SPO 文型“不幸的女人+疑惑地望着+她”[不幸な女が+訝しげに彼女を+眺めた]、例(51)もやや複雑な SPO 文型で作る否定文“丑姐儿+并不是+很丑”[みにくい姉さんは+決して容貌が悪い+わけではない]なので、一般文型であれば、翻訳も基本的には原文との対応関係が認められる。ただし、一般文型の文であっても、以下の文に見られるように、中日両言語では対応していない文もある。

(52) 满足的笑, 苍老的笑, 豪迈的笑! ——风暴淹不住, 雷霆盖不住, 海浪埋不住!
(『人民』93-4-111)

老いた三人の、満足し切った笑い、枯れた笑い、豪邁な笑い! それは暴風にも、雷にも、怒涛にもおさえられはしなかった! (同上)

(53) 安谧的街心便又多了一座洁白的塑像…… (『人民』97-2-87)

静かな平和な夜の町に、もう一つ雪だるまが大きくなっていった (※雪だるまがもう一つ増えた/多くなった)。(同上)

(54) 为了鸽子少一声啼哭多一个笑脸加一件新衣, 他曾被雷电的金鞭抽下大海, 曾被黑鲨的尾鳍砍断肋骨, ……鸽子 19 岁了, 是条美人鱼呢! 日子里浸透了欢笑。
(『人民』93-4-111)

鴿子の、一喜一憂、一枚の新しい衣服のために、雷に打たれて海にはねとばされ、サメの尾ひれであばらを折ったこともあったが……もう十九になり、人魚のように美しい! 日々は楽しい笑い声に満ちていた。(同上、93-4-110)

例(52)の下線部“风暴淹不住, 雷霆盖不住, 海浪埋不住!”[それは暴風にも、雷にも、怒涛にもおさえられはしなかった!]は、主述文の並列系“风暴+淹不住, 雷霆+盖不住, 海浪+埋不住! ”、訳文は原文の述語にあたる 3 か所をまとめて訳している。見事な訳である。例(53)の下線部“安谧的街心便又多了一座洁白的塑像”[静かな平和な夜の町に、雪だるまがもう一つ増えた]の訳[静かな平和な夜の町に]には、かなりの工夫がみられる。例(54)の下線部“为了鸽子少一声啼哭多一个笑脸加一件新衣”[鴿子の、一喜一憂、一枚の新しい衣服のために]は、さらに工夫を凝らした訳である。3 例はいずれも単語レベルでは対応していないが、分文や文レベルでは意味的に対応している。次の使役文や比喩表現も単語レベルでは対応していないが、文レベルでは対応していると言えるだろう。

- (55) 娘锄地间苗，娘刷锅做饭，娘缝衣补被，娘破冰浣洗……。娘啊！你太苦了，过度的劳累 8 你一个四十多岁的女人变成仿佛六十老妪。（『人民』97-5-87）
 畑仕事、炊事、針仕事、氷を割っての洗濯——母さん、ご苦労だなあ！仕事のしすぎでまだ四十なのに、もう六十の婆さんに見えるよ。（同上、97-5-86）
- (56) 鸽子的变化使他目眩，使他恐慌。（『人民』93-4-111）
鸽子の変化に爺さんはうろたえた。（同上、93-4-110）
- (57) 无声的雪花，如银如絮，立刻盖住了这对拥抱着的父子。（『人民』97-2-87）
銀のような綿のような雪が音もなく降ってきて、抱き合った親子をたちまち包み込んだ。（同上）

例(55)の“过度的劳累让你一个四十多岁的女人变成仿佛六十老妪”[仕事のしすぎでまだ四十なのに、もう六十の婆さんに見えるよ]の原文は使役文だが、訳文は能動文⁶⁾になっている。原文の使役文を能動文に訳すのも簡単ではない。例(56)の下線部“鸽子的变化使他目眩，使他恐慌”[鸽子の変化に爺さんはうろたえた]は、原文は二つの形容詞による使役文だが、訳文は一つの動詞による能動文⁷⁾となっている。これだけ文構造が違うにもかかわらず、文意としては適訳である。経験を積まないと、なかなかこのようには訳せない。例(57)の下線部の比喻表現“无声的雪花，如银如絮”[銀のような綿のような雪が音もなく降ってきて]もかなり工夫が凝らしてある訳である。“絮”は[柳絮]だが、日本では柳絮をほとんど見かけないので、[綿]として訳してある。日本人なら誰にでもわかる見事な訳となっているので、名訳としか言いようがない。

以下では、「対の文化」の影響を受けている連述文⁸⁾・“把”字句などの訳文についても検討してみよう。

- (58) 妈再抱他，他再下来。搬个小凳坐在门口。（『人民』89-7-98）
 また寝かせると、また起きて、戸口に腰掛けを運んでそこにすわった。（同上、89-7-99）
- (59) 船舱里三个年迈的渔夫铁青着脸，无声地抽烟；阿根和鸽子坐在船板上，互相用眼睛传递着惶惑。（『人民』93-4-111）

⁶⁾ 日本語にはヴォイスの体系があるので、使役文を能動文で訳しても問題ない。

⁷⁾ この訳も日本語にはヴォイスの体系があるので、使役文を能動文で訳しても問題ない。また、二つの形容詞もそのまま訳すと長くなるので、いくつかの形容詞や動詞を一つの形容詞や動詞（例44）で訳すこともある。

⁸⁾ 連述文は一般には連動文と呼ばれている。しかし、次の文のように連用連語の一方が形容詞の場合もあるので、筆者は連述文と読んでいる。

她爬楼快极了，像她驾驶公共汽车一样。（『人民』90-4-98）

さすがにバスの運転手だ。階段をかけ上がるのも速い。（同上、90-4-99）

船室では三人の老いた漁師が青黒い顔をして黙々とタバコを吸っている。阿根と鴿子は船板に腰かけて不安の目を見かわしている。(同上、93-4-110)

- (60) 望着娘充满希冀的目光，我不敢再强硬，只得接过娘递来的一叠浸透着汗渍的纸钞，又回到县高宽敞明亮的教室里复读。(『人民』97-5-87)

期待しているんだよ、という目つきにそれ以上は逆らえず、おふくろが差し出す汗の滲んだ札束を受け取って、再度受験勉強をしないため、県立高校の広くて明るい教室に戻ってきた。(同上、97-5-86)

上掲3例の下線部は、例(58)の連用連語“搬个小凳坐在门口”の訳が「戸口に腰掛けを運んでそこにすわった」で、語順通りに訳す「腰掛けを運んで戸口にすわった」のほうが分かり易いし短く訳せているので優れているような感じがする。しかし、日本語は「戸口に腰掛けを運んで座った」と訳す方が「～に～を+動詞[運んで]+動詞[座った]」の構文に沿っているので分かり易い。例(59)の“互相用眼睛传递着惶惑”は「不安の目を見かわしている」と訳されている。「～を+複合動詞[見かわしている]」は日本語の基本構文である。例(60)の“又回到县高宽敞明亮的教室里复读”[再度受験勉強をしないため、県立高校の広くて明るい教室に戻ってきた]と訳されているが、[受験勉強をしないため、再度県立高校の広くて明るい教室に戻ってきた]と訳す方がいいだろう。これは[再度]の用法の問題である。

原文が「対の文化」の影響を受ける連述文で書かれた上掲3例の訳文は、既述のようにいずれも「非対の文化」の影響を受ける基本的な日本語の構文に従って訳されている。次の介詞“把”などを用いる動詞連語も「対の文化」の影響を受けている。

- (61) 星月居是这一带的第一家个体饭馆，大家爱上这儿来吃饭。(『人民』94-10-97)

星月居は、この辺の食堂では初めての個人経営で、みんながひいきにしてくれた。(同上、94-10-96)

- (62) 北方的冬天来得早。这天，晚饭后爸爸说到对面楼里去会棋友杀两盘。(『人民』97-2-87)

北国は冬の訪れが早い。父親はこの日も夕食を済ますと、向かいのアパートにすむ将棋仲間と一局指す、と行って出て行った。(同上)

- (63) 可是，说归说，他仍是把星月居办得倍儿棒！(『人民』94-10-97)

そうは言いながらも彼は、星月居をどんどん繁盛させていった。(同上)

- (64) 醒来，不见了妈，屋里空荡荡的，他把嘴唇咬出了血。(『人民』89-7-98)

目をさますと、母がいなくなっていた。がらんとした部屋で、安安は唇を噛んだ。血がにじんだ。(同上、89-7-99)

- (65) “再说，你好不容易从老远的地方回来，要把家乡的柚子带到外国去，应该买点好

的、甜的。”(『人民』93-6-111)

「それに、おじさんはせっかく遠いところから来られて、ふるさとのザボンを外国まで持って帰られるんですから、もっとおいしい、甘いのを買われたほうが」(同上)

例(61)(62)は介詞を用いる動詞連語である。例(61)の下線部“大家爱上这儿来吃饭”[みんながひいきにしてくれた]の構造“大家+爱+上这儿来+吃饭”の“上”と例(62)の下線部“这天，晚饭后爸爸说到对面楼里去会棋友杀两盘”[父親はこの日も夕食を済ますと、向かいのアパートにすむ将棋仲間と一局指す、とって出て行った]の構造“这天，+晚饭后+爸爸+说到对面楼里去+会棋友+杀两盘”の“到”は介詞である。“上这儿来吃饭”は「場所+行為」、「到对面楼里去会棋友杀两盘」は「場所+二つの行為」であり、対の文化の影響を受けていると言える。

例(63)(64)(65)は“把”字句である。例(63)(64)(65)の下線部“他仍是把星月居办得倍儿棒”[彼は、星月居をどんどん繁盛させていった]、“他把嘴唇咬出了血”[安安は唇をかんだ。血がにじんだ]、“要把家乡的柚子带到外国去”[ふるさとのザボンを外国まで持って帰られるんですから]の構造は、“他+仍+是+把星月居+办得+倍儿棒”“他+把嘴唇+咬出了血”“要+把家乡的柚子+带到外国去”で、日本語[彼は、+星月居を+どんどん繁盛させていった][安安は+唇を+かんだ。血が+にじんだ][ふるさとのザボンを+外国まで持って帰られるんですから]とは構造がだいぶ異なる。原文のこれらの構造は、“把星月居办得倍儿棒”は「組織+行為」、「把嘴唇咬出了血」は「身体+現象」、「要把家乡的柚子带到外国去」は「モノ+行為」に分けられるので、やはり対の文化の影響を受けていると言える。それに対し訳文は、非対の文化による日本語の構造に沿って訳されている。

5 おわりに

中国語はSPO文型、日本語はSOP文型、これらが中日両言語の基本文型であり、これらが複雑な文型の基本となっている。中国語がSPO文型を基本としていれば、日本語に訳すことは、工夫をすれば何とか訳せるであろうが、対の文化を受けている以下の文のような連述文や兼語文などは、そのまま訳したのでは間違いではないが、日本語としてややぎこちなくなってしまう。

(66) 我八点坐校车去学校。(作例)

私は八時に学バスに乗って学校に行く。(中国語の語順に沿った訳文)

私は八時に学バスで学校へ行く。(筆者訳)

(67) 请您参加这届大会主席团。(作例)

こんどの大会の議長団に入ってください。(筆者訳)

どうすれば日本語らしくなるのか。難しい問題ではあるが、上掲の分析に従うのであれば、原文の構造と意味をよく把握し、訳文となる日本語の構造をよく理解し、原文の文意を表せるように、非対の文化で訳す日本語の文構造（例 66、…に…で…へ…）に従って訳していくのがいいだろう。

例（66）の二つの訳文は前者が対の文化の影響を受ける中国語の文構造に従って訳し、後者は非対の文化の影響を受ける日本語の文構造に従って訳している。中国語の文構造に従って訳しても意味は通じるが、リズムがぎこちなくなる。例（67）は“您”が直前の動詞“请”の客語であると同時に、直後の動詞“参加”の主語でもあり、兼語になっている。この原文もやはり中国語の文構造に従って訳すと、どうしてもぎこちない日本語になってしまう。これも訳文のように、日本語らしい日本語に訳すためには、日本語の文構造に従って訳さないと、いかにも中国語の訳文のようで、日本語らしくなくなってしまう。翻訳は日本語を深く理解していなければ、ぎこちない日本語となり、いかにも外国語の訳文のようになってしまう。

私たち日本人が、言語活動において「聞く・話す・読む・書く」ができるのは、言うまでもないことである。しかし、「聞く・話す・読む・書く」ができるということは、かなり日本語を勉強しなければならぬ簡単なことではない。中文日訳などの翻訳は意味が正確であるばかりでなく、リズム感のある日本語らしい日本語に訳さなければならない。意味が正確であることはもちろん大切だが、同時に日本語らしいリズム感を出すことも大切である。

中国語は SPO 文型、日本語は SOP 文型、これらが中日両言語の基本文型であり、簡単な文型から複雑な文型までの基本となる。中国語は、このほか連述文や兼語文および介詞を用いる動詞連語などのように「対の文化」の影響を受ける文もある。日本語には、このような文がほとんどないので、この対の文化の影響を受けた中国語をどのような日本語に訳すかが難しくなる。「対の文化」の影響を受けた原文の訳文は、推敲を重ねて、非対の文化の訳文になおす方がいいだろう。

中国語の文が SPO 文型を基本としていれば、どんなに難しくても、日本語に訳すことは、工夫をすれば何とか訳せるだろう。しかし、対の文化を受けている以下の文のような連述文や兼語文は、そのまま語順通りに訳したのでは間違いではないが、日本語としてはリズムの面でややぎこちなくなる。

（68）我七点半骑自行车去学校。（作例）

私は七時半に自転車に乗って学校に行く。（中国語の語順に沿った訳文）

私は七時半に自転車で学校へ行く。（筆者訳）

（69）他们回家吃饭。（作例）

彼らは帰宅して／家に帰って食事をとる。（中国語の語順に沿った訳文）

彼らは家で食事をとる。(筆者訳)

(70) 今晚我请你吃晚饭。(作例)

今晚、僕が君を晩御飯に招待するよ。(中国語の語順に沿った訳文)

今晚、晩御飯をおごるよ。(筆者訳)

(71) 他们鼓励我们去报名。(作例)

彼らは私たちが申し込みをするよう励ましてくれます。(中国語の語順に沿った訳文)

彼らは私たちに申し込みをするよう勧めてくれます。(筆者訳)

どうすれば日本語らしい日本語になるのか。上掲の分析に従えば、重複を避け(二格の名詞)や日本語の文構造(私は七時半に自転車で学校へ行く)に従って訳するのがいい。上掲の3つの訳文は前者が中国語の文構造に従って訳し、後者は重複を避けるなどの日本語の文構造に従って訳している。中国語の文構造に従って訳しても、意味は通じるが日本語としてのリズムがややこちなくなる。

私たちは「聞く・話す・読む・書く」ができるだけでなく、翻訳は意味が正確で、日本語の文法体系に沿った575を基本とする俳句のようなリズム感のある日本語らしい日本語に訳す必要があるだろう。

例文の出典と略称

1. 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1996 『人民』
2. 『人民中国』楽らく対訳 人民中国雑誌社 2014～2017
3. 『人民中国』対訳世相小説 人民中国雑誌社 2018～

参考文献

日本語文献

1. 相原茂・石田知子・戸沼市子(1996)『Why?にこたえるはじめての中国語文法書』同学社
2. 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
3. 金水敏(2011)『役割語研究の展開』くろしお書店
4. 興水優・島田亜美『中国語分かる文法』大修館書店
5. 鈴木康之(2000)『日本語学の常識』海山文化研究所
6. ———(2011)『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
7. 朱徳熙著・杉村博文・木村英樹訳(1995)『文法講義』白帝社
8. 高橋弥守彦(2006)『実用詳解中国語文法』郁文堂
9. ———(2017)『中日対照言語学概論—その発想と表現—』日本僑報社

10. _____ (2020) 『中日翻译学的基础与构思—从共生到共创』外语教学与研究出版社
11. 松村達夫 (1978) 『翻訳の論理 英語から日本語へ』玉川大学出版部
12. 丸尾誠 (2010) 『基礎から発展までよくわかる中国語文法』アスク出版
13. 李臨定著／宮田一郎訳 (1993) 『中国語文法概論』光生館
中国語文献
1. 丁崇明 (2009) 《现代汉语语法教程》北京大学出版社
2. 樊平 刘希明 田善继 编 (1988) 《现代汉语进修教程 语法篇》北京语言学院出版社
3. 房玉清 (2008) 《实用汉语语法》北京语言大学出版社《实用》
4. 耿二岭 (2010) 《汉语语法》北京语言大学出版社
5. 李宝贵 (2005) 《语法精讲与自测》北京大学出版社
6. 梁鸿雁 (2004) 《HSK 应试语法》北京大学出版社
7. 卢福波 (2011) 《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
8. 陆庆和 (2006) 《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
9. 徐昌火 (2005) 《征服 HSK 汉语语法》北京大学出版社
10. 杨德峰 (2004) 《汉语的结构和句子研究》教育科学出版社